

データを正確に解釈するための
6つのポイント

連載にあたって

サイエンスはスポーツと似ている。どちらもフェアプレイ精神に則って行なわれるからだ。しかし、スポーツには“精神”と“ルール”があり、両者があってこそはじめて公正な競技が保証される。一方、サイエンスではどうだろうか。精神に関しては最近いくつかの公的・私的機関から“正しい心構え”的なものが発表されているが、ルールについては明文化されたものはないといっても過言ではないだろう。これまで、暗黙のルールは共有されているものと信じてそれを確認する作業を怠ってきたが、実はそれは個人やラボごとに異なっており、その良識に大きく依存しているのではないだろうか。そしてこの状態は、これだけサイエンスやそれを取り巻く社会状況が変化しているにもかかわらず、明治時代からほとんど変わっていないのではないか。

スポーツの世界でドーピング禍が大問題になっているのと同様に、サイエンスの世界でも不正の問題があとを絶たない。これはある意味、必然の結果とも思える。スポーツマンもサイエンティストも、もともとは趣味の延長上で行なっていたものが急速に職業化したからにすぎない。厳然たるルールがあるスポーツですら、金銭や名誉がかかった場面では不正が横行しているというのに、いわんや明文化されたルールをもたないサイエンスをや、である。それでも、大部分のサイエンティストは真面目にフェアに取り組んでいることは、(当たり前とはいえ)むしろ賞賛に値することであろう。

しかしながら、ルールが明確でないことは過ちを生みやすい。そして、それを許容する土壌が醸成されかねない。さらに、過ちを装った捏造も起こりうるだろう。また、ルールがないために、大多数の正しいサイエンティストすら恐る恐る進んでいるようにも見える。とくに、研究をはじめたばかりの若手サイエンティストに、どこまでがフェアでどこからがアンフェアなのかきちんと示すことは、正しいサイエンスのあり方の確立に重要であることはいうまでもない。

では、なぜいままできちんとしたルールが策定されてこなかったのか。それは、あまりに多岐にわたる諸技術や諸条件に対して、それを行なうことがほとんど不可能だからであろう。筆者も、完璧なルールをつくることを提案するわけではない。むしろ、問題提起と、よくある問題に対するコンセンサスの形成を行なう場を提供したいと考えている。

ライフサイエンス分野で最大の学会のひとつである日本分子生物学会では、科学的不正をなくすために若手教育からきちんと見直そうという視点から、2007年より若手教育問題ワーキンググループを設置し、メンバーには世界を相手に奮闘中の30歳代から40歳代の6名を集めた。この連載は、これらのメンバーがどのように考えているかを披露してもらい、それに対して意見を受けることによって双方向的なディスカッションを行なってコンセンサスの形成につなげていこうとする、まったく新しいタイプの試みである。若手・中堅・シニアどの層からも広く意見を募り、活発な議論が展開され、それによっていっそうサイエンスの健全性が確保されることを願ってやまない。

九州大学生体防御医学研究所

中山敬一

(日本分子生物学会 若手教育ワーキンググループ 座長)